

中村光夫全集

第七卷

中村光夫全集

第七卷

筑摩書房

中村光夫全集 第七卷
昭和四十七年三月二十五日発行

著者 中村光夫

発行者 竹之内静雄
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇二一九一
電話 東京例 七六五一(代表)
振替 東京 四一一三
印刷 株式会社 精興社
製本 牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72507 (出版社) 4604

第七卷目次

プロレタリア文学当面の諸問題	3
バルザックに関するエンゲルスの手紙	13
須井一のリリシズム	18
作家としての自覚	21
転向作家論	30
中野重治氏に	51
プロレタリア文学運動——その文学史的意義	70
純粹小説論について	75
生活と制作と	98
私小説について	116
古雑誌など	141
文学の衰弱	144
作品より作家へ	148
リアリズムについて	151

一語、曰く混沌……	173
先輩と新人……	176
現代文学について……	178
近代文学の借着……	186
批評について I……	197
新しい常識文学……	200
文学伝統について……	209
文芸時評……	217
雑感……	225
文芸時評について……	230
東京の文学……	236
技巧の羞恥……	248
影響論……	261
文壇の沈滞の反省と決意……	288
開化の風潮と自然主義……	293
外国文学の鑑賞……	304

手記と文学	313
文芸雑誌について	318
大東亜戦下・文学の方向	323
熱情を失った文芸雑誌	328
文学の框	330
私小説の論議について	341
批評について II	350
作家の文明批評	359
文学雑誌と雑誌文学	366
批評と文壇	375
二つの死	378
「生理」について	392
戦争の手傷	407
近代日本文学	414
憂鬱な対話	448
中間小説	458

精神の速力……………	464
批評の職分……………	471
私小説の末路……………	473
批評家とは何か……………	479
ロマン派文学と日本の近代文学……………	482
モデル小説……………	489
同人雑誌……………	496
大正文学の性格……………	503
可能性の窓……………	513
小説の二十五時……………	515
風俗小説論……………	525
解題……………	635
解説……………	619
本多秋五……………	

文学論(一)

プロレタリア文学当面の諸問題

——創作方法に就いて

1

去年の十二月頃朝日新聞で立野信之氏が文学に於ける人間性の問題を論じて居られた。それは現今のブルジョア文学の代表者達の主張する「文学に於ける永遠の人間性」を否定して、プロレタリア作家は「階級的人間を描かなければならない」といつた意味のものだつたと記憶してゐる。プロレタリア作家の任務としてのこの規定は正しいか？ 私は誤つてゐると思ふ。少なく共、我国のプロレタリア文学の当面してゐる創作方法の問題の答としては全く不十分な且つ危険なものだと考へる。何故か？ それは昔からの優れたブルジョア作家も皆「階級的人間を描いてゐる」からである。

ロマン主義、自然主義、理想主義、人道主義等々ブルジョア文学のレットテルは更に沢山ある。

然しその内容、つまり作家の現実に対する態度は、レアリズムと非レアリズムの二つしかないのである。ハリコフ会議に出席したアルフレッド・クレラもかう云つてゐる。

「創作する芸術家の現実に対する態度、即ち彼が現実を観念論者として観察するか唯物論者として観察するかが、最後の所決定的になる。従つて全文学史は二つの大きな潮流、観念論者と唯物論的な潮流の内に入れられる。」

(革命的文学の組織化)

そして彼等の内で最も優れた作家達がレアリストの——唯物論的な——態度を取つたのは云ふまでもない事で

ある。(尤も此の事は彼等が哲学の領域で唯物論者であつた事を意味しない。文学の領域ではレアリスト、哲学の領域では観念論者——かういふ作家は実に多い。これはブルジョア文学特有の興味ある矛盾だが今此処では触れない事にする)

所が現実——ブルジョア社会——は階級対立の、階級闘争の社会である。淫乱と悲惨の、偽善と流血の社会である。

人間は其処では門閥により、境遇により、或はブルジョアの、或は貴族の、或は労働者の、農民の衣裳をまつてゐる。僧侶の法衣、軍人の制服、官吏のフロックコート、総ての人間は此等種々の型に押し込められてしまふ。そしてその型は人間の心まで各々の刻印を押す。其処では人は多かれ少なかれ歪められてしまふ。つまり其処には階級的人間しか居ないのだ。だから芸術家の眼がリアルである限り、彼は階級的人間をしか描かなかつたのだ。

何故ならレアリストの眼は事物を具体的に把握するからである。

例をあげればバルザックの「従妹ベット」のクルヴェルは典型的なバリ・ブルジョアではないか。トルストイの「戦争と平和」のイリア・ロストフ「伯爵」はロシア貴族の——ゾラの「大地」のビュトウはフランス小農の、標本ではないか。

ブルジョア文学も、ブルジョア社会の上向期には、即ちプロレタリアートの文化的擡頭によつて現在の狭い袋小路に追ひつめられない間は、現実を——社会をも自然をも——全体的に把握し、表現しようとする情熱に燃えてゐたのだ。

森田草平氏、正宗白鳥氏等を先輩とする現在のブルジョア文学の貧弱な後継者達が彼等の先人の遺した輝かしい作品の中に「永遠の人間性」をしか見ない事は勝手である。

然しそれは黄鉄礦を研究するのに当つて段々と黄鉄礦の概念を捨象して、遂に「礦物」といふ「概念」に到達

して黄鉄礦を「理解」したと信ずる観念論者と同じ事をやつてゐるのだ。この時彼が如何に「黄鉄礦は礦物なり」といふ永遠の真理に到達した積りで狂喜しても、黄鉄礦が銅と鉄と硫黄の化合物である事は決して彼には理解されないのである。

成程人間が、母親から裸で生れ、着物を着、物を食べ、恋ひをし、生殖をして、死ぬ事は何時も同じであらう。然し人間に関するそれだけの智識で人間——例へば私——を理解したと信ずる者があれば、その人は大痴けである。さういふ人は法律学者にでもなるより外はないのである。

蒼然たる「永遠の人間性」はブルジョア文学の幽霊である。

立野氏は幽霊を斬らうとして自ら傷いたのだ。勿論我々プロレタリア作家は階級的人間を描く。何故なら我々は最も徹底したレアリストであるから。然しそれはブルジョア文学でもやつてゐた事なのだ。だからそれを現在、日本に於いてプロレタリア文学の創作方法として無批判に掲げる事は敵へのプロレタリア文学の武装解除を意味する。

立野氏の云ふ様に同じ労働者でも自由労働者と工場労働者は違ふし、又金属労働者の中でも旋盤工と鑄物工は氣質等が違ふ事は確かである。然し我々がいくら克明にそれを描いても吾々の到達する所はゾラであらう。ゾラの作品の内でも悪作であらう。何故ならゾラも階級的人間を描いただけではないからである。つまり我々が階級的人間を描くだけでは全く不十分なのである。それでは我々に何が必要か？ 此処で問題を一步進めねばならぬ。

2

此処まで書いて来た時私は一人の友人に会つた。その友人は我々が「集団」の様な雑誌を出すのは小市民の遊戯であり単なる自己満足のためである。といふ意見を持つてゐた。

それで彼の仲間にはこれと同意見の人が多いといふ事だつた。この人達は皆真面目な尊敬すべき人達である。もし果してさうならば、我々はさうしたものを即時解体しなくてはならない。

そしてこの疑問に答へる事によつて私は自分が今論じようと思つてゐる問題を解決すると思ふので私は之を扱ひたいと思ふ。問題は結局の所、我々がプロレタリア文学（芸術）を創りたいと願ふ事が単なる自己満足の欲求であるか否かといふ事になるのである。

かう判然といつてしまふとこの問題は余りに明かである様に私には思へるが、此等の人達はプロレタリア文化といふものは政權獲得の後までは必然的にブルジョア文化に劣つたものであるといふ風に漠然と考へてゐて、プロレタリア文学とは大衆文学に対抗するための読物位にし考へてゐない。

私は先づレーニンの次の言葉を引用しよう。「多くの人々は今日の時期の困難と危険をばパンと見世物を以て克服する事が出来ると真実に確信してゐる。パンを以て——それは云ふまでもない！ 見世物については——やらずがいい。併しそれに際して、見世物は——真実の大きな芸術でなく、むしろ程度の差こそあれ綺麗な娯楽であるといふ事を忘れない様にさすべきである。これに關聯して、忘れてはならないのは吾が労働者農民はローマのルンペンプロレタリアートとは似ても似つかぬ者であるといふ事である。彼等は國家の勸定書で養はれてゐるのではなく、自己の労働によつて國家を養つてゐるのである。彼等は革命を『遂行』した。そして血を流し無数の犠牲を払ひつつ革命の事業を擁護した。

事實吾が労働者農民は見世物よりも偉大な何物かに倣ひするものである。彼等は真実に偉大な芸術に対する權利を獲得した。それ故吾々は先づ第一に最も広汎な民衆の教育、教養を主張する。それは文化のための地盤を創造する。勿論パンの問題の解決された条件の下に於いてであるが……この地盤の上に自己の内容に適應した形式を創造する所の真実に新しい偉大な共産主義的藝術が成長しなければならぬ。この道の上に巨大な重要性と高い課題を解決する事が吾がインテリゲンツに課せられてゐる。彼等はこの課題を理解し、解決して初めてプロレタリア革命に対する義務を果し得る。プロレタリア革命こそは共産黨宣言に於いてはあの様に巧みに特質づけられてゐる低い生活条件から彼等を自由の野に導く扉を広々と彼等の前に押し開いたのである。」（レーニンと芸術、

これは一九二〇年饑饉と内乱のモスコウで云はれた言葉である。そして今年は五ヶ年計画の最終年度たる一九三二年である！

そして日本のプロレタリアートと農民は芸術に働かないであらうか？

否、遠くは米騒動、亀戸事件を始め、特に三・一五、四・一六、後の絶えまない××テロに抗して、立ち上りつつある日本プロレタリアート、「血を流し無数の犠牲を払ひつつ」革命的諸組織の旗を守り抜いて来た日本の労働者農民は、齷齪をはやして金ブチ眼鏡を掛けた「智識階級」等より百倍もいい芸術に働するのである。

前に引用したレーニンの言葉が十月革命以後のものであるといふ人の為に更に次の言葉を引用しよう。

「我々の困難な時代における当面の任務は——何等か直接又は間接に支配的『泥濘』を支持しつつある。『誹謗』の人々及び『衰弱せるインテリゲンツ達』に対抗し得べきものを創造する事である。当面の任務は——最も苦しい諸条件の下であらうとも鋳脈を掘り下げ、鉄を掘り出し、マルクス主義的世界観とこの世界観に相応するところの上部構造の鋼を精錬する事である。」（一九一〇年）

「仕事に取り掛れ、同志諸君！我々の前には困難な、しかも新らしい、偉大な高貴な任務——社会民主主義的労働運動と密接な不断聯繫に於て、広汎な多面的な、多様な文学的事業を組織する事が立つてゐる。」（一九〇五年）——（レーニンと芸術、七十一頁）

「現在の日本に於いて真実に文学を求め、創造しようとしてゐる階級は、多年の抑圧と無知から眼覚め、少年の様に新鮮な頭脳の鋼鉄の様に強い手を以て、世界を認識し、把握し、自己の文化を持たうと努力するプロレタリアートのみである。ブルジョアは最早文学に働ひもしなければ、文学を求めもしないのである。「オフエリヤ遺文」よりも彼等はダンスホールを好むのである。

勿論私は芸術と政治は同じ位重要だ等とは考へない。若しさうだつたらばレーニンは芸術家になつてゐたらう。我々は清潔な心を持つた同志達が文学を振り棄てて政治運動に専念するのを引留めるべき何物をも持たないので

ある。芸術といふものは完全な共產主義社会の来るまでは——其処では人は科学者か芸術家か何れかになるだらう——何時もいくらか余計なものである。(無用なものではないが——)

然し、一旦我々がプロレタリア文学を作らうとした以上は、我々は全存在を挙げて芸術的に優れたプロレタリア文学を生む事に努力しなければならない。ディレッタンティズムは断じて許されないのである。文学は一生の事業である。

3

此処で私は一先づ先刻の問題に立ち帰る。

前に私は階級的人間を描くだけでは不十分だと云つたが、実は問題はそんな処にはないのである。

読者諸君は既に私が前に例にあげた小説の人物が皆主人公でない、云はば傍系の人物ばかりな事に気が付いて居られると思ふ。小説で人を描くには——立派に描くためには——此方の腹がしつかり決つてゐなければならぬ。云ひ換へれば現実に対して確りした「態度」を以て対さなければならぬのである。

「創作する芸術家の現実に対する態度」とアルフレッド・クレラも云つてゐる。

これは土台が確りしてゐなければ家が建てられないのと同じである。(だが、土台も何もないバラック小説が何と多い事か!)

文学といふものは私は作家の現実に対する態度、身構へを表現したものだと思つてゐる。

「テーマとは現実その中でなく現実に対する作家の積極的態度である。」(リベディンスキイ)

所が世界は流転し、進化するものであるから、現実も、それに対する作家の態度も常に進展する。だから確りした態度とは確り運動する態度の事である。

どうも云ひ表はし方が拙いのであるが、つまり立派な作家の心といふものは奔流する現実をピッタリと抱いてそれを流動の裡に把握し、働きかけて行く心なのである。

だから作家の心は本来弁証法的なのである。此処に私が先刻触れたブルジョア作家達の矛盾（文学の領域では唯物論的、哲学の領域では観念論的）の原因に対する解答があるのではなからうか。本来透徹した彼等は現実に直面してゐる間はレアリスティック（唯物論的）な態度を取らなければならなかつたが、彼等の燃え上る心は、絶えず自己の発達を希ふ心は機械論的な当時の唯物論の框を脱して観念論的な弁証法（縦令それが明確な形態を取らなく共）へ飛躍したのではなからうか。

今迄の優れたブルジョア作家達は皆この確りした態度を持つてゐたのだ。所がこの確りした態度とはつまり確りした世界観の事である。だから偉い作家とは確りした世界観を自己の物にしてゐた作家なのである。プロレタリア文学はイデオロギーが多すぎるから（何て変な言葉だ！）芸術的でないと「赤風車」の顧問龍膽寺氏等の愛用の議論である。

それでは今迄の如何なる「ロマンの建設者」が自己の生活の理論を持たなかつたか？

ドストイェフスキイ、トルストイは勿論、スタンダール、バルザック等々の小説は彼等の世界観（文学理論）の創作の実践への適用ではないか。文学上の凡ゆる流派を否定したフロオベルでさへ、自己の人生観察から得た結論、人間の根柢は愚劣であるといふ世界観を確く把持してゐたのだ。

従来プロレタリア文学が責めらるべき所があるとすれば、それはマルクス主義的な世界観が自分のものに完全になつてゐなかつた点である。所謂イデオロギーが世界観でなく単なる正義感に過ぎなかつた点である。

世界観——この言葉は二三年前には流行言葉であつたが——を造る事は決して人々の思つてゐるやうに容易なものではない。マルクス主義の本を二三冊読んでそれでマルクス主義的世界観が出来上るなんていふ簡単なものでは決してない。

或人の世界観とは其の人の観察と思考の総和である。それは一生かかつて築き上げられるものである。だから我々は先づ現実を観察してそれから結論を描き出さねばならない。書物は唯その方法を指示して呉れるに止まるのである。

我々が現実を忠実に観察するならば、必ず我々は唯物弁証法的な結論に到達する筈である。何故ならそれは客観的真理であるから。プロレタリア作家は確りしたマルクス主義的世界観を自己の裡に鍛へ上げなければならぬ。勿論現実との絶え間ない關係に於て――。

4

此処まではブルヂョア文学と同じ事である。それでは我々は何によつてブルヂョア作家と異なるか？ マルクス主義的世界観そのものによつて。

「従来の哲学は世界を解釈する哲学であつた。然しマルクス主義は世界を交革する哲学である。」この言葉の持つ深い意味を我々はもう一度考へて見なければならぬ。

哲学が文学の邪魔をする、とはよく云はれる事である。

成程カント主義文学とかヘーゲル主義文学などといふものは成り立たなかつた。

モウパッサンも決してシヨウベンハウエルの哲学から厭世観を抜き出したのではなかつた。然しマルクス主義文学は何故成り立つたか。それはカント等の哲学は世界を離れて世界を解釈してゐる哲学である。だからそれは現実に触れ、現実を描く上には何の役にも立たないのである。そしてそれ等の哲学は生來唯物論的、弁証法的な作家の心を規定する上には何の役にも立たないものである。

だから優れたブルヂョア作家が哲学を輕蔑したのはこの限りで正しいのである。

然しマルクス主義哲学の場合は今迄と反対である。作家の態度が現実に働きかける意志に貫かれてゐる場合に交革の哲学、行動の規準としての哲学は常に作家の導きの糸となるのである。唯物弁証法哲学は哲学の終焉を公言してはばからぬ哲学である。それは頭の中の「体系」ではなくして、現実に作用する槌子である。だからマルクス主義の世界観（哲学）と文学とは作家の脳裡では同一物である。

此処に吾々はブルヂョア文化の背反、混乱に対してプロレタリア文化の調和、綜合を見るのである。